
南国のクリスマス

ありま氷炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

南国のクリスマス

【Nコード】

N8852P

【作者名】

ありま氷炎

【あらすじ】

「南国の魔法」から半年後の武田タカオと上杉カナエの話です。甘い恋愛小説です。

香港で忙しく働くカナエはお客のケルビン・スンにある日、日本の料亭に呼び出されて…*ブログで完結後、なろうへ掲載しています。

南国のクリスマス1（前書き）

「南国の魔法」から半年後の武田タカオと上杉カナエの話です。甘い恋愛小説です。

南国のクリスマス1

「カナエさん、お待ちしてました」

流暢な日本語を話すイギリス人華僑のケルビン・スンはそう言つて上杉カナエを個室に招いた。

そこは日本の料亭とまったく同じづくりの座敷だった。

カナエは履物を脱ぐと座敷の中に入った。座敷に入ると煙草の臭いが鼻についた。確か室内では禁煙だったのはずなのにとカナエは眉をひそめた。見るとケルビンの側にある灰皿に煙草の吸殻が2・3本捨ててあつた。ヘビースモーカーの彼がカナエを待つ間吸つていたようだった。

ケルビン・スンは香港の若手実業家で、香港が中国に返還される前にイギリス国籍を取得した華人だった。ジュディ・チュアの会社は日本から廃棄されるような部品を安くで入手して、香港経由で中国に加工して売っていた。ケルビンはその加工したものを大量に買つてくれる一番のお客だった。

今日は来週の製品の納品についてのミーティングのためだったのだが、ケルビンの希望でここに食事を取りながら話すことになっていた。

カナエがケルビンと最初に会ったのは香港に来たばかりの半年前だった。カナエは香港に来て、日本側とのやり取りや書類の作成などを仕事の中心にしていた。お客の大半が中国人でカナエが広東語も中国語も話せないのでお客の相手はもっぱらジュディが担当していた。

しかし、このケルビンは日本に留学したこともあり、日本語が流暢なのでジュディはケルビンだけはカナエに任せていた。

ケルビンの視線がカナエに注がれた。いつものように猫のような瞳だった、

カナエはケルビンの眼鏡の奥から見えるその瞳が苦手だった。それはタカオが心を封印されていたときと同じ輝きだった。

カナエはケルビンに気づかれないようにため息をつくとき、彼の向かいの席に座った。久々に座る畳の感触は足に心地よかった。

「カナエさん、香港にきて日本食満腹に食べてないでしょう。そう思って今日は私がよく来るお店に来てもらいましたよ」

ケルビンはそう言って微笑んだ。彼の顔の作りは悪くなかった。多分ハンサムの部類に入るだろう。細いフレームの黒縁眼鏡がよく似合っていた。

「スンさん、申し訳ありませんが私達はあなたにお仕事をいただいている立場です。こんな風に夕食に招待されても困ります。」

カナエがケルビンの向かい側で表情を硬くしたままそう言うとき彼は微笑を浮かべた。

「カナエさん、これは私からのあなたへの気持ちです。私はあなたが好きなのです」

ケルビンは両肘をテーブルにつき、顔の前で手を合わせながら視線をカナエに向けていた。眼鏡の奥の瞳が輝いていた。

「すみません。そういうことでしたら私は帰ります」

カナエがそう言って席を立とうとするとケルビンが立ち上がりカナエの両腕を掴んだ。

「私は香港でそれなりの富と力を持っています。あなたが私のものになってくれれば、一生贅沢に暮らせませよ。」

ケルビンはカナエを引き寄せるとそう耳元で囁いた。

「！」

次の瞬間、カナエは手を振り払うとケルビンの体を押しつけ、その

わき腹に蹴りを入れた。ケルビンは声を出せずにその場にうずくまる。

「悪いが私はそういう女じゃない」

カナエは座敷にうずくまるケルビンにそう言い放つと襖を開け部屋を出た。

そして店を出るために足早に廊下を歩いた。

廊下を歩きながらカナエは明日ジユディにどう説明するか考えていた。

南国のクリスマス2

「お帰り〜」

家に帰ると部屋から武田タカオが顔を覗かせた。カナエはその顔を見るとほっとした。

「早かったね。今日は取引先と夕食って言っていたよね」

いつものとおり着替えをするために部屋に入ってきたカナエにタカオはそう聞いた。カナエは何も答えず、コートとジャケットを脱ぐ。先ほどあったことを話したくなかった。タカオに余計な心配をさせるのが嫌だった。

「上杉…」

シャツのボタンに手をかけていたカナエを、タカオは後ろから抱きしめた。

「何かあった？大丈夫…」

カナエを抱きしめながらタカオは眉をひそめた。タバコを吸うはずがないカナエからタバコの匂いと男物のコロンの香りがした。

「客になんかされた？」

タカオは顔を険しくさせながらそう聞いた。

「ちよつとセクハラされた。殴り飛ばしたけど」

カナエは後ろから回された手を包むように掴んでそう答えた。

「当然だな。僕の上杉に手を出そうなんて」

タカオはカナエの髪に顔をうずめるようにした。

「髪までタバコくさい。上杉、一緒に風呂入ろうよ。僕もまだなんだよ」

「！」

その言葉にカナエはぎよつとして掴んでいたタカオの手を離した。

「冗談。自分で入る。」

カナエはそう言うつと着替えの服を取り、慌てて部屋を出て行った。

裸を見られるのは嫌だ。
ましては明るいところで。

タカオは部屋を出て行ったカナエを残念そうに見ながらもふと単なるセクハラではない気がしていた。

「ねえ。昨日どうだったの？」

翌日事務所に着くとジユデイ・チュアがすでに入社していた。その顔から面白い話を期待しているのがわかった。昨日とった行動が会社にとつては大きな打撃になることをカナエは知っていた。

でも言わないといけない。

カナエは深呼吸をすると口を開いた。

「実は昨日…」

そう言いかけると会社の電話が鳴った。ジユデイは舌打ちすると受話器をとった。

「ウエイ？」

中国語（普通語）でそう始まり、ジユデイが広東語を話し始めたのがわかった。カナエはいまだに中国語（普通語）も広東語も話せなかったが、その音の違いはわかるようになっていた。香港人の多くは英語と広東語の他、中国語も話せるようになっていたが、巷ではまだ広東語が主流のようだった。

「カナエ、ケルビンよ。昨日のことで電話よ」

ジユデイが不可思議な顔をしながらカナエに電話に転送した。すぐに机の上の電話の呼び出し音が聞こえ始めた。ジユデイの視線を感じながらカナエは息を吐くとボタンを押して受話器をとった。

「スンさん、上杉カナエです。」

「カナエさん！昨日はすみませんでした。お詫びに今度お昼をご馳

走らせてください。ジュデイも同席しても構いません」
一人だけ誘うと警戒されると思ってかケルビンはそう言った。

ジュデイも一緒だし。

会社にとっては一番の顧客だ。

しょうがないか…

「昨日のことは忘れます。私も申し訳ありませんでした。お昼はジュデイと楽しみにしています」

「よかった。ありがとう。今度また連絡します」

ケルビンは電話口でほっとしたようにそう言つと電話を切った。

「ねえ、何かあったの？」

「いや、別に」

ジュデイに説明することもないだろうと思つてカナエはそう答えた。

カナエは昨日の件がこれで解決したものと甘くみていた。プライドを傷つけられたはずのケルビンが詫びの電話をかけてきたことに何も疑問を持っていなかった。

南国のクリスマス3（修正）

「シャオシエン！」

先月入社したばかりのメイリン・タンがタカオをそう呼んだ。

タカオは苦笑を浮かべながら振り返る。

大陸から来たメイリンは英語ができず、現地の香港人から冷たい目で見られていた。またスタッフの日本人ともなかなかコミュニケーションが取れていなかった。タカオは中国語ができ、同僚の香港人のように冷たい態度をとらないのでメイリンは何かとタカオを頼っていた。

直属の上司の藤宮ノボルはそんなタカオに本気にも取れる忠告をしていた。

「寝るなら覚悟しろ。大陸の女は一度寝ると大変だぞ。」

「言われなくてもそんな関係になるわけがないですよ」

そんなノボルにタカオは苦笑しながらそう答えていた。

メイリンは小柄な中国人女性だった。目が大きく、かわいらしかった。しかし感情の起伏が激しく、そのかわいい顔を台無しにしていた。

タカオはメイリンを見るたびに火の精霊カーナを思い出し、苦笑いをしていた。

「シ、シンガポールですか？1週間も、しかもメイリンと一緒に……」
タカオは上司のノボルの言葉に詰まった。

出張といわれた時期はクリスマスだった。

カナエと付き合ってから初めてのクリスマスだった。

高校の時は一緒に祝うことなど考えられなかった。

だから今度のクリスマスはカナエと過ごしたかった。

タカオが黙っているとノボルが笑って口を開いた。

「お前、彼女がいるんだったよな。だったらクリスマスに彼女をシンガポールに呼んだらいいじゃないか。南国のクリスマスもなかなか楽しいぞ」

ノボルの言葉にタカオは断れないものを感じた。彼には香港に来てから色々世話になっていた。

恩を返さないといけないだろうな……

「……色々考えていただきありがとうございます。そうさせていただきます」

タカオがそう答えるとノボルは意地の悪い顔をした。

「メイリンも一緒だから。楽しいクリスマスになるかもな。まあ、会社としてはぜひ武田に行ってもらいたいからな。よろしく頼む」

ノボルはタカオの肩を叩くと笑いながら昼食をとるために部屋を出て行った。

部屋に残されたタカオはシンガポール出張に嫌な予感を感じながら、カナエに出張のことを伝えるために携帯電話をポケットから取り出した。

「あ、上杉？今大丈夫？」

カナエが電話口に出たのを確認してタカオはそう言った。

「ごめん、またシンガポールに出張なんだ。今度は少し長くて1週間。断れなくてごめん。でもクリスマスは一緒に過ごそう。南国のクリスマスだ」

「シャオシエン」

そう話していると甘えた声がすぐ側で聞こえた。メイリンはタカオが携帯電話で話中だと分かると、その電話を奪い取った。

「ワタシ、シャオシエン ト イツシヨ、シンジャポーク。ジャ

マシナイデ」

そして携帯電話を両手で抱えると覚えたての拙い日本語で叫んだ。

「メイリン！」

タカ才は舌打ちをすると慌ててメイリンから携帯電話を奪い返す。

「上杉ごめん、会社の子。日本語覚えてばかりなんだ。後でまた電話するね」

そしてそう言うのと電話を切り、タカ才は鋭い視線をメイリンに向けた。

「??? 做? 个? (どうしてそんなことするんだ?)」

その問いにメイリンは動じることなくタカ才を見つめ返した。

「因? 我???! (だってワタシはあなたを愛してるの!)」

南国のクリスマス4

きーんと頭の中で音がした。

電話から聞こえた声で隣にいたジユデイも顔を上げる。

「上杉ごめん、会社の子。日本語覚えたばかりなんだ。後で説明するから」

雑音が聞こえた後に、タカオはあわただしくそう言うのと電話を切った。

「今の子、多分大陸の子ね。かわいいわね。恋敵に一生懸命日本語で話そうとするなんて」

ジユデイは呆然としてるカナエに意地の悪い笑みを浮かべた。

「カナエもぼーとしていたら彼氏取られるかもよ。みんな積極的なんだから」

カナエはジユデイの言葉を聞きながら先ほどの片言の日本語を思い出していた。

武田がシンガポールに出張といていたけど、その彼女と一緒になのか。

だから「ジャマシナイデ」って言ったのか…

タカオのことを信じているけどカナエは先ほどの片言の日本語が頭から離れなかった。

家に帰ると誰もいなかった。

タカオがカナエより帰りが遅いのはいつものことだったが、今日はなんだか早く会いたかった。

部屋に入り着替えをすませ、ベッドに横になった。

自分達が再び付き合い始めたことで多くの人を傷つけた。

シンスケと正式に別れたときに、シンスケの両親はカナエの家族に冷たい言葉を投げかけた。シンスケは大人気ないと言っていたがカナエは当然の結果だと思っていた。

カナエの母はシンスケと別れたカナエのことが許せず、香港に来る際も見送らなかつた。

タカオのほうもいろいろあつたのを知ってる。

宮園ユキコさん…

やさしげな女性らしい人だった。

結婚まで決まっていたものが破談となり、その痛みは容易に想像できた。

自分達の関係のためにいろんな人が傷ついた。

人の痛みの上に自分たちの関係がある。

だからカナエは昼の電話くらいで少し不安になる自分が嫌だった。

「ただいま」

少し疲れた声がしてタカオが家に帰ってきたのがわかった。

「お帰り」

カナエは部屋から出るとタカオにそう言った。タカオはカナエを見ると笑みを浮かべ、抱きしめた。

「ごめん。大丈夫？」

タカオはカナエが昼間のメイリンの変な電話で不安になっていると気づいていた。

「同僚のメイリンなんだ。なんか僕に気があるみたいで。でもきちんと上杉のこと話したし、心配しないで」

タカオはカナエの長い髪をその手に絡めながら、その髪に口づけた。「僕は上杉しかいないから。愛してる」

タカオはそうついいながら唇をカナエの唇に重ねた。唇からタカオの

思いが伝わった。

カナエはタカオの口づけで不安がすべて消えていくのがわかった。

そして3日後、タカオはシンガポールに旅立った。

カナエとジュディはケルビンと昼食をとるために高級レストランに来ていた。

「やっぱりケルビンってカナエを気に入ってるみたいよね」

円卓に座り、ケルビンを待ちながらジュディはそう言った。

「かわいい子とシンガポールに行った彼氏はやめて、こっちにしたら。お金持ちだしハンサムよ。しかもうちのお得意様だし」

ジュディの言葉にカナエは黙ってその黒い瞳を向けた。

「冗談よ」

笑いながらジュディはそう言うと、ケルビンがレストランに入ってくるのが見えた。

「すみません。遅れてしまいました」

相変わらずジュディ同様、流暢な日本語でケルビンはそう言った。

その視線はカナエに向けられてる。ジュディはケルビンがカナエを手元に置きたいと思っていることに気づいていた。カナエにケルビンと関係を持つてほしいとは思っていなかったが、ジュディは武田タカオのことをよく思っていなかった。カナエが松山シンスケと別れ、タカオを選んだことが納得がいかなかった。

一度だけ香港でタカオと会うことがあった。ハンサムな優男だった。シンスケとはまったく別でジュディが嫌いなタイプだった。

その日の昼食は来年に向けて計画などを話すだけで終わった。

カナエは昼食中、ケルビンが自分に向ける視線に居心地悪さを感じていた。

「ジュディ、ごめん。今後スンさんとのミーティング、私抜きにし

てもらえないか」

事務所に着くとカナエはジュディにそう話した。ジュディは渋い顔をした後、ため息をついた。

「しょうがないわ。いいわ。でもケルビンがぜひって言ったら一緒にいってもらうわよ」

「ありがとう。わかってる」

カナエはほっとして笑顔を見せた。

南国のクリスマス5

12月のシンガポールは意外にそんなに暑くないことにタカオは気づいた。営業先のスタッフが言うには雨季の時期に入っていて、少し気温が下がっているらしい。空を見ると以前来たときは青い空が頭上一面に広がっていたが、今はその空が黒い雲に覆われて雨が降り出しそうだった。

「確かフードセンターで待ってるって言ってたっけ」

タカオはホテルの部屋から出るとロビーを抜けた。ホテルの横には現地の人が利用し、安い値段で食事ができるフードセンターが隣接していた。

メイリンもタカオもなんでも食べられるほうだったので夕食はフードセンターで取ることにしたのだった。

メイリンは白い少し汚らしい円卓がたくさん並んでいるうちの後ろのほうに座っていた。そしてその横には薄汚れたTシャツをきた中年の男が座っていた。

「走?! (あっち行って!)」

「? 要??? 多少? (お金必要だろう? いくらだ?)」

そんな会話が聞こえた。

タカオが近づくと男はびっくりして逃げていった。

「美琳。? 好?? (メイリン、大丈夫?)」

男が去った後、タカオがそう聞くとメイリンはタカオに抱きついた。そして悔しいとその腕の中で泣いた。

シンガポールは多民族国家であるがおよそ75%以上が華人であった。そして中国大陸から来る一部の女性が売春をすることもあり、現地のスケベな中年や老人が中国人女性と見ると声をかけることがたまにあった。メイリンはそういう風に思われたのが悔しくて泣いているのか、中国人女性皆がそういう思われるのが悔しく泣いているのかわからなかった。

しかしその悔しさは理解ができた。タカオは子供をあやすようにその背中を泣き止むまで摩りつづけた。

それから、メイリンはますますタカオに言い寄るようになってしまった。好きな彼女がいて、別れるつもりはない。あきらめてくれと何度も言っても、結婚してないからまだチャンスはあると引き下がらなかった。

メイリンは妹のようでかわいかったが、タカオにとってカナエに変わる存在はこの世にいなかった。

「ごめん。カナエ！ケルビンがどうしてもって言うの。夕飯付き合っただけで。」

ジュディに頼まれてカナエはしぶしぶケルビンと夕食を一緒にとることになった。しかし場所はカナエが指定し、人が多くいるレストランにした。

「スンさん」

ケルビンの姿が見え、カナエは椅子から立ち上がった。

「カナエさん、どうぞ。座ってください」

ケルビンは嬉しそうにそう言ってカナエが座るのを確認するとその向かいの席に腰を下ろした。

「今日はどういいうご用件でしょうか？」

カナエはケルビンと視線を合わせないようにして口を開いた。彼はカナエのそんな様子に苦笑した。しかし眼鏡の奥の瞳は笑っていた。

それは奇妙な光を帯びているように見えた。

「カナエさん、やはり私はあなたが忘れられません。でもあなたが私の物になるのは無理だと分かっています。そこで取引しませんか。一度だけ、私に抱かれてください。そうすれば私はあなたのご友人の会社の製品を買い続けましょう。もしそうでなければ私の力で会社を潰します」

「な、何を」

カナエは眼を見開いてケルビンを見た。

「先週蹴られた時にすでに会社を潰すか考えたんですが、止めました。でもやはりあなたを一度抱いてみたくなりました。あなたは美しい…」

ケルビンはそう言ってカナエの髪を触れた。カナエはその手を払いのける。

すると彼は皮肉な笑みを浮かべた。

「ジュディの会社の命運はあなたの態度次第です。これは私の携帯電話の番号です。決心がつけば電話をください。3日間待ちましよう」

ケルビンは小さな名刺をテーブルの上に置くと立ち上がった。

「それではまた」

カナエはケルビンの笑みを忌々しく見送った後、テーブルの上に置かれた名刺に視線を向けた。

「3日間か…」

3日後はクリスマスイブだった。そしてその日仕事帰りにシンガポールに行く予定になっていた。

警察にいつてもだめだろうな。

ケルビンほどの実業家であれば警察の上層部につながっているのは必須だった。

一度だけ、一度だけなら…

いいだろうか…

ふとタカオの顔を思い出した。

カナエが愛する男…

そしてカナエを愛する男…

しかし、カナエはそれと同時にジユデイがどれだけ会社に力を注いできたか、この半年間でみたことも思い出していた。

私が応じなければ確実に会社は潰される。

この街は力がすべてだ。

武田…

一度だけ、一度だけだ。

許してくれ。

翌日、カナエは電話をした。

そしてその夜会うことになった。

ジユデイはケルビンとの夕食についてカナエに聞いた。しかしカナ

エは何も言わなかった。

ただ青白い顔を見せ、寝不足の様子だった。何かあったのは確かだとジユデイは感じていた。

南国のクリスマス6

「どうぞ、こちらへ」

カナエの姿を確認して嬉しそうにケルビンは微笑むと座敷の中に案内した。

座敷は以前来たときと同じように煙草の臭いが鼻についた。履物を脱ぎ、中に入る。

「まずはご飯でも食べましょう。私の横に座ってください。そのつもりで来てますよね？」

カナエはため息をつく、ケルビンの隣に座った。

「こんな無理強いして楽しいか？」

ケルビンの腕に抱かれ、その顔を睨みつける。そして芸者のように徳利に入った酒を盃に注いだ。できることであればこの前のように回し蹴りでも食らわせたかった。しかしできないことはわかっていた。

「無理強い？楽しいですよ。私にこびる女など山ほどいますから。

こうやって嫌がるあなたを抱いていると征服欲っていうものですか？かきたてられて、ぞくぞくします。さあ、そろそろ上に行きましょう。部屋をとってあります。」

部屋は最上階だった。

香港の夜景が一望できた。

こんな夜じゃなければ美しく感じただろうな

カナエはそんなことを思いながら窓から外を見た。

「カナエさん」

ぞっとするような甘い声が耳元で囁かれ羽織っていたジャケットが

剥ぎ取られた。

カナエは眼を閉じた。

「あなたの彼氏は武田タカオさんでしたよね？彼女がこんなことをしているとは知ったらどう思いますかね？軽蔑？」

「なんでそんなことを知ってるんだ！」

カナエは窓に背を向けると至近距離でケルビンを睨んだ。

「この香港で私が知りたいと思えばなんでも知ることができるのですよ。」

そう言っただけで笑うケルビンの背中越しに香港の美しい夜景が見えた。

日本という国と飛び出して自分の力を試したかった。

でも結局女という壁に阻まれたか……

「あなたは美しいですよ。日本であなたのような美しい女性に会えることを楽しみにしたのですが……でもここであなたに会えてよかったです」

ケルビンは嬉しそうに笑い、カナエに口づけようとした。

「口だけは嫌だ」

カナエは唇を噛むと顔を背けた。ケルビンは眼鏡を取ると頬を掴み強引に口づけた。カナエはケルビンの唇を噛むとその体を力いっぱい押しつける。

ケルビンの体がベッドの側に飛ばされた。

「抵抗されるのも楽しいですね。」

ケルビンは唇についた血を真つ赤な舌で舐めると立ち上がった。

やっぱりだめだ。

嫌だ、こんなの。

ごめん、ジユディ。

カナエは床に落ちたジャケットを拾うと部屋を出て行くこととした。

「どこにいくのですか？」

ケルビンはカナエの腕を掴んだ。すごい力だった。

「やっぱりできない。こんなの嫌だ。お願いだ。ジユデイの会社をつぶすのは止めてくれないか」

「だめです。あなたが私のものになってくれなければ会社は私の力を使って潰します。武田さんには黙ってあげましょう。何も結婚してくれと言っているわけではないのです。私のベッドの相手になってくれればいいだけの話です」

ケルビンはカナエの両腕を掴み、その体を引き寄せた。

「美しいカナエさん、あなたがベッドの上でどうなるか見せてください」

ケルビンの整った顔が近づく。

嫌だ。

こんなの死んだほうがましだ！

カナエがそう思った瞬間、部屋のドアは乱暴に開かれた。

そして警官の制服を着た男達とジユデイ、そしてタカオの姿が見えた。

「カナエ、本当あんたって不器用ね。わたしを誰だと思ってるの。ジユデイ・チュアよ。私のコネを使えばこんな男どうにだってできるんだから」

ジユデイは男たちに広東語で指示を飛ばしながらカナエにそう言った。

「上杉、ジユデイは政府の上層部に親戚がいるんだよ。だからこの男より権力が上ってことだよ。金よりやはり権力が先だからね」

タカオはあきれた笑みを浮かべながら呆然とするカナエを抱きしめた。

「本当、君に何かあったら僕は生きていけない。わかっていないんだから」

カナエはタカオの腕の中でただその言葉を聞いていた。

「じゃあ、クリスマス楽しんでね！」

警官たちがケルビンを連れて行くのを確認し、ジユディは別の車に乗りながらそう言った。

ケルビンはパトカー乗ってからも広東語でジユディをののしる言葉を叫んでいた。

「これで解決ってわけ？」

「そう、これからジユディの親戚の人がいろいろがんばってくれるみたいだよ」

カナエの肩を抱きながらタカオはそう答えた。タカオの温かさを感じ、カナエはコートを座敷に忘れてきたことを思い出した。タカオは両手を温めるようにしているカナエを自分のコートで包み込む。

「さ、上杉。シンガポールに戻るうか」

「そっだ、お前。確かシンガポールにいたはずだ。なんでここに？」

思い出したようにそう言うカナエにタカオは微笑んだ。

「マオに教えてもらったんだ。飛行機が間に合っってよかった。あと少し遅れていたら危なかったよね」

「マオ？銀の精霊？」

「そっだよ」

南国のクリスマス7

「上杉！着いたよ。起きて」

タカオの声でカナエは目を覚ました。

数日間の疲労がたまっていたのか、緊張が解けたせいか飛行機の中でカナエがぐっすり寝ていた。

近代的な美しい空港に降り立ち、タクシーを拾ってホテルに向かう。

街の中心はクリスマス一色だった。通りの木々に照明や飾りがつけられ、街のいたるところでクリスマスツリーを見ることができた。

多民族国家あり国際都市として名を馳せるこの国ではクリスマスは盛大に祝われていた。南国でありながら雪を模倣した飾りなどがあり、クリスマス気分を味わえた。

「びつくりしないだね」

ホテルの部屋を開けるとベッドには若い女性が倒れていた。いや、熟睡していたというのは正しいだろう。

昨日の朝、タカオが取引先に会う前に富の噴水を見に行ったら、銀の精霊が現れカナエのことを知らせてくれた。そしてその場に偶然居合わせたメイリンが騒ぐので、銀の精霊が眠らせてしまったのだ。この世界では基本的に魔法は使えないが富の噴水の周りでは微量な魔法が使えるようだった

「美琳。早安！起来。起来？！（メイリン、おはよう。起きて、起きて！）」

タカオがベッドの上のメイリンに呼び掛けるとその目をゆっくりと開いた。

「シャオシェン！」

メイリンはタカオの顔を見ると抱きついた。タカオはメイリンの体をゆつくりと引き離すとベッドに座らせた。

「？是我的情人。？是UESUGI」

タカオの言葉を聞き、メイリンはその大きな瞳をじつとカナエに向けた。

「ワタシ。シャオシエン。アイシテル。シャオシエン。ワタサナイ」そしてそう声に出した。カナエはそんなメイリンを見つめ返した。

「武田、今から私が話すことを訳してくれ。」

カナエがそう言うのとタカオはうなずいた。

「私は武田が好きだ。愛してる。あなたには渡さない。死んでもだ」タカオは一瞬目を細めてカナエを見た後、メイリンに視線を向け中国語に訳した。

するとメイリンはカナエをじつと見つめ、その後タカオに目を向けた。そして口を開く。

タカオはメイリンの言葉を聞いた後、少し考え、日本語に訳した。

「最初からわかっていた。でも諦めなくなかった。シャオシエンだけが私の理解者だった。香港は冷たい。私はさびしかった」

カナエはタカオの訳をじつと聞いていた。

「？不起。但是我？孝生。（ごめんなさい。でも私は武田を愛してる）」

カナエが拙い中国語でそう言うと、メイリンは下を向いた。

タカオはじつとカナエの顔を見つめていた。本当であればカナエを今すぐ抱きしめたかった。こんな風に思いを口にするカナエをタカオはあの世界から帰ってきて見たことがなかった。

「ワカツタ。ワタシ。アキラメル。而且他年？大，我想找一个年？的。（だってあなたは年取ってるし、私は若い人を探すわ）」

メイリンの言葉にタカオは苦笑した。カナエは意味がわからずタカオの顔を見つめる。

「わかつたって。諦めるみたいだよ。美琳。因??可?，所以?一定能找到好的男人（メイリン、君はかわいいから、きっといい人が

見つかるよ)」

タカ才がそう言うのとメイリンは火の精霊カーナに似た勝気な笑みを見せた。

「当然了(当たり前前よ)」

窓にかかるカーテンの隙間から外の光が入ってきた。雨季にしてはめずらしく太陽が出ているようでまぶしい光だった。

「富の噴水にいかなくてもいいの？」

街を歩きながらカナエはそう聞いた。タカ才はカナエの背中に手を回すとその頬にキスをした。

「行かない。今日はクリスマススイブだよ。誰にも邪魔されたくない」
「武田、ちよつと」

街中でキスをするタカ才にカナエは眉をひそめた。

「久々に会ったんだ。二人つきりになりたい。あの男とキスはしたんだろう？僕が全部消してやる」

タカ才はケルビンの唇が切れて血が少し出ているのに気がついていった。多分カナエが噛んだということは容易に想像できた。

「他の男と寝たら君を殺して、僕も死ぬ。わかったね。上杉」

タカ才はカナエをじっと見つめた。その黒い瞳に困ったような自分の顔が見える。

「わかったよ。もう馬鹿なことほししない」

「当然だ」

タカ才はカナエの抱きしめ、その髪に顔をうずめた。

「煙草の匂いだ。あの男の。上杉、今日は絶対に僕と一緒に風呂に入ってもらおう。いいね」

「わかった」

カナエは真つ赤になりながらタカ才の腕の中でしぶしぶうなずいた。逆らうことはできなかった。

南国のクリスマススイブの夜が始まるうとしていた。

夕暮れが過ぎ去り、薄暗くなる中、街のイルミネーションに明かりが付き始めていく。

大勢の人が行き交う中、タカオとカナエはイルミネーションが輝く街の通りを二人で歩いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8852p/>

南国のクリスマス

2011年7月12日12時08分発行